

平成 30 年度研究拠点形成事業 (A.先端拠点形成型)
最終年度 実施報告書

(本報告書は、前年度までの実施報告書とともに事後評価資料として使用します。)

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	東京大学東洋文化研究所
アメリカ側拠点機関：	プリンストン大学
フランス側拠点機関：	社会科学高等研究院
ドイツ側拠点機関：	ベルリン・フンボルト大学

2. 研究交流課題名

(和文)： 新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築

(英文)： Global History Collaborative

研究交流課題に係るウェブサイト：<http://coretocore.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

3. 採択期間

平成 26 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日

(5 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：東京大学東洋文化研究所

実施組織代表者 (所属部局・職名・氏名)：東洋文化研究所・所長・榊屋友子

コーディネーター (所属部局・職名・氏名)：東洋文化研究所・教授・羽田正

協力機関：なし

事務組織：東京大学東洋文化研究所事務部

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：アメリカ合衆国

拠点機関：(英文) Princeton University

(和文) プリンストン大学

コーディネーター (所属部局・職名・氏名)：(英文) Department of History・Professor

・ Jeremy ADELMAN

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

経費負担区分：パターン1

(2) 国名：フランス共和国

拠点機関：(英文) Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales

(和文) 社会科学高等研究院

コーディネーター(所属部局・職名・氏名)：(英文) Research Centre for History・Professor
・Alessandro STANZIANI

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

経費負担区分：パターン1

(3) 国名：ドイツ連邦共和国

拠点機関：(英文) Berlin Humboldt University

(和文) ベルリン・フンボルト大学

コーディネーター(所属部局・職名・氏名)：(英文) Institute of Asian and African Studies
・Professor・Andreas ECKERT

協力機関：(英文) Berlin Free University

(和文) ベルリン・自由大学

経費負担区分(A型)：パターン1

5. 研究交流目標

5-1 全期間を通じた研究交流目標

1. 新しい世界史理解と叙述の探求と確立：従来、世界各地における世界史の見方は、ヨーロッパ中心史観を下敷きとするという点では共通点を持ちながらも、国や地域によって多様だった。この多様な世界史の見方を拠点間で相互に参照・批判するとともに、現代世界において必要な地球への帰属意識(地球市民意識)を共有できる新しい世界史の理解と叙述の方法を、拠点間の議論を通じて探求し確立する。

2. ミクロな歴史研究との交流：新しい世界史研究の成果を、一国史や地域史などミクロ・レベルの歴史の研究者に投げかけて当該研究領域における既存の知の再検討を促す。また、その再検討結果を新しい世界史の解釈に活用する。この相互往復運動の繰り返しによって、歴史研究全体の活性化を図る。

3. 上記2つの大目標を達成するために、4研究機関が緊密に連携し、新しい世界史研究と教育のためのネットワーク型拠点を構築する。このネットワークによって実現を図る主な事業は次のとおりである。

①研究者の交流：毎年一定数の研究者、PDを他の3拠点機関に派遣し、同時に3拠点機関から研究者を受け入れる。派遣・受け入れ研究者は、派遣先・受け入れ先で講演や授業を行い、国際共同研究に参画する。

②①と連動させる形で、毎年いずれかの拠点機関でテーマを定めた研究集会とセミナーを開催する。

③毎夏、いずれかの拠点機関で公開サマースクールを開講し、4拠点機関の大学院学生を中心に広く世界の若手研究者に世界史学習と研究交流の場を提供する。また、博士論文を準備中の大学院生に対して、4拠点機関の研究者からなる指導チームを編成し、より完成度の高い論文が執筆できるように共同で指導する。

5-2 平成30年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

これまでの事業を通じて形成された4拠点間の相互理解と協力関係をさらに深化させ、安定的な教育研究協力体制を構築する。テーマを定めた4拠点共同のセミナーやサマースクールを開催する。また、パリ拠点の研究者が東京大学に滞在する機会をとらえ、共同授業を行う。ネットワークの充実と拡大を目指し、世界各地で活動しているグローバル・ヒストリー研究者との連携を図る。具体的には、サマースクールに4拠点以外の研究機関からの教員と学生を招くこと、中国やペルーの大学における講演と学術交流（本事業経費外）や、海外3拠点以外の研究者との共催ワークショップ、海外3拠点以外の研究者の参加するワークショップの開催などを考えている。

<学術的観点>

4拠点の研究者が執筆したグローバル・ヒストリーに関する論文集『グローバル・ヒストリーの可能性』を日本語で刊行する。また、“national(ist) histories of globalization or world-making”を共同研究の新たなテーマとして設定し、グローバル化する世界を背景に、世界各地で国民史がどのように形成されてきたのかについて、共通の理解を得るための事例を報告するセミナーを、ベルリンとプリンストンで開催する。また、その成果を論文集として公表する準備を進める。

<若手研究者育成>

第4回4拠点共同サマースクールをフランス社会科学高等研究院で開催し、各拠点から参加する複数の研究者が共同で大学院学生を指導する。第3回東大ープリンストン・ウィンタースクールを東京大学で開催する。また、意欲あるPDや大学院学生を1～6か月間海外の拠点に派遣し、知見と視野の拡大、研究テーマに関する海外研究者による指導の機会を与えるとともに、海外3拠点からの若手研究者を東大拠点で受け入れ、双方向の学術交流を進める。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

日本国内において、新しい世界史/グローバル・ヒストリー的な歴史研究への理解を深め、それを根付かせるための取組を企画し、実行する。上記の論文集刊行はその一環であるが、それ以外にも、協力研究者による講演や研究会、一般向けのインタビューなどを実施する。

5-3 研究交流成果に対する達成度とその理由

- 研究交流目標は十分に達成された
- 研究交流目標は概ね達成された
- 研究交流目標はある程度達成された
- 研究交流目標はほとんど達成されなかった

【理由】

過去4年の交流を経て、4つの拠点の運営に責任を持つ研究者の間で、相互の信頼関係が確立し、6-1に詳細を記すように、様々な事業を計画通りスムーズに実施することができた。海外の3拠点との間で、互いの研究状況と関心についての理解が十分に進み、今後の研究交流のさらなる深化が見通せるようになった。研究交流目標として定めた諸項目は、すでに十分に実現している。今年度について、その具体例を以下に3つに分けて記す。

1) 研究協力体制の構築

代表研究者の羽田は、2018年10月にパリの社会科学高等研究院 EHESS (パリ拠点) で「新しい世界史」という考え方について講演したが、聴講していた Carré 教授から 2019-20 年度に EHESS で連続講義を行なってほしいとの依頼を受けた。また、パリの拠点責任者 Stanziani 教授が長期で東京拠点に滞在した機会を利用し、連続授業やシンポジウムなどの企画を実行した。双方の有力研究者同士のつながりはますます緊密となり、次の共同研究への展望が広がっている。

2018年度にプリンストンから来日した Colley 教授は英国史、グローバルヒストリー研究の世界的権威であり、Canadine 教授はプリンストンで教育研究を行う一方、British Academy の会長を務めている。世界の歴史学界の重鎮である著名な両教授が、プリンストン大学側の資金で東京拠点を訪れ講演と学術交流を行ったこと自体が、両拠点間ですでに強力な研究協力体制が構築されていることの証である。両教授は「今回の東京訪問は、この1年で最大の学術的成果であり、大きな刺激を受けた」とコメントし、東京再訪を希望されている。また、2019年3月にプリンストンを訪れた東京拠点の松方冬子、後藤春美は、両教授と共同研究のアイデアを親しく語り合っている。

2) 学術的観点

4拠点合同のワークショップとして、“National Narratives of Global Integration”と題する研究集会を、パリ(2018年6月)と東京(2019年1月)で開催した。この共同研究の趣旨は、これまで一国史の枠組みで語られ、理解されてきた過去の様々な事象を、グローバルな文脈で再検討し、参加者の徹底的な討論によって、世界史の文脈から全体として新たに一貫した解釈を提案しようとするものである。4拠点から13人の研究者がこの企画に参画し、すでに2017年に2回の討議を行っている。この連続ワークショップは、ネットワーク全体として特徴のある革新的な研究成果を世に問うためのもので、4つの拠点の相互信頼と研究協力体制があってはじめて実現できるものである。また、2019年秋以後は、次のテーマとして「identity」を取り上げることで、話し合いが進んでいる。

3) 若手研究者育成

5年間の研究拠点形成事業が終了するにあたり、2019年3月に、過去5年の間にジュニア・メンバーとして本事業 Global History Collaborative (以下 GHC) の活動に参画した若手研究者たちが、彼ら自身の発案によって、総まとめのワークショップを自主的に開催した。当日は、様々な分野を専門にする十数人のメンバーが出席し、このうち5人(内田、江本、岡本、寺田、門間)が、GHCに参加しての自らの経験と今後の課題の発見について報告し、活発な意見交換が行われた。すでに博士論文を書き終えポスドクとして研究に従事している人も含め、全員がGHCを肯定的にとらえ、いかに大きな刺激と知識をそこから得たかということを強調していた。『歴史の建設—アメリカ建築論壇とラスキン受容』と題して出版された江本弘の博士論文は、第8回東京大学南原繁記念出版賞を受賞している。彼らは、受託事業の終了後もグローバルヒストリーに関心を持つ若手研究者のグループを維持し、その自主的な研究交流活動を継続するとしている。GHCを通じて優秀な若手研究者の育成と彼らの間の連携は、想定していた以上に進んでいる。

6. 研究交流成果

6-1 平成30年度の研究交流成果

<研究協力体制の構築>

1) 研究者の相互派遣

プリンストンに3人(後藤、松方、森永)、パリに2人(羽田、山本)、ベルリンに2人(弓削、山本)の研究者を派遣し、講演や研究者との意見・情報交換を行った。これまでの同種の活動と今年度の活動を合わせ、相互の研究状況と関心についての理解が十分に進んだ。一方、受入れとしては、パリの拠点責任者 Stanziani 教授が、2018年4~9月の間、長期で東京拠点に滞在した。この機会を利用し、いくつかの企画を実行した。まず、拠点メンバーの中島が責任者となり、Stanziani 教授によるグローバルヒストリーに関する6回の連続授業を開催した。東京大学の複数の研究科から大学院学生が数多く出席し、毎回白熱した討議が展開された。Stanziani 教授は、授業の外でも大学院学生の指導に気軽に応じ、彼らは大きな刺激を受けた。中島と Stanziani 教授は、「食」の歴史に関するシンポジウムも開催した。次に、日仏会館・フランス国立日本研究所との共催で、『新しい世界史へ』から『グローバル・ヒストリーの可能性へ』と題するワークショップを開催した。それまであまり付き合いのなかった日本在住フランス人研究者が数多く出席し、主として、日本とフランスにおけるグローバルヒストリー研究の可能性と課題についての有意義な意見交換がなされた。

プリンストンからは、Colley、Canadine 両教授が来訪し、講演会を開催するとともに学内外で学術交流が行われた。Colley 教授は英国史、グローバルヒストリー研究の世界的権威であり、Canadine 教授はプリンストンで教育研究を行う一方、British Academy の会長を務めている。著名な両教授の講演会とあって、会場は満席、立ち見が出るほどの盛況であり、講演後の質疑応答もきわめて活発だった。

2) 3 拠点以外の海外研究機関、研究者との交流

4つの拠点によるネットワークが閉鎖的であってはならないので、一部は別の資金を用いて、3拠点以外の海外研究機関や研究者との交流を図った。主な活動としては、ケント大学（英）との合同シンポジウム、ウォーリック大学（英）との合同ワークショップ、ペルーのサンマルコ大学での講演会（本事業経費外）、Beijing Forumでの講演（本事業経費外）、上海ブックフェアでのブックトーク（本事業経費外）、オーストラリア国立大学・北京大学との合同ウィンタースクール（本事業経費外）それにオクスフォード大の Feener 教授、北京大学の李伯重教授による講演会などがある。

<学術的観点>

4拠点合同のセミナーとして、“National Narratives of Global Integration”と題する研究集会を、パリ（2018年6月）と東京（2019年1月）で開催した（一部、本事業経費外）。この共同研究の趣旨は、これまで一国史の枠組みで語られ、理解されてきた過去の様々な事象を、グローバルな文脈で再検討し、参加者の徹底的な討論によって、世界史の文脈から新たに全体として一貫した解釈を提案しようとするものである。4拠点から13人の研究者がこの企画に参画し、すでに2017年に2回の討議を行っている。今年度2回のワークショップで議論は十分に深まったので、全参加者がペーパーを完成させ、最後のまとめの集会を、2020年1月にプリンストンで開催し、成果はその後論文集として刊行される予定である。

<若手研究者育成>

1) 派遣と受入れ

パリに1人（王）、プリンストンに2人（史、麻田）の大学院学生を派遣した。彼らは、各拠点で受け入れ研究者から研究指導を受けるとともに、拠点での授業や研究活動に参加し、研鑽に努めた。また、プリンストンから4人の大学院学生を受け入れた。

<サマースクール・ウィンタースクール>

2018年6月に、パリで第4回GHCサマースクールを開催した。4拠点から研究者、大学院学生が計30人近く集まり、個々の大学院学生の博士論文執筆計画を材料に、様々な角度から意見・情報の交換を行った。1週間、朝から夕方まで集中的に議論を行うので、学生にとってはきわめてハードな体験だが、このスクールを経験すると、学生は目に見えて大きく成長する。

2019年1月には、東京でプリンストン大学との間でのウィンタースクールを開催した。形式は4拠点合同のサマースクールと同様である。東京拠点から参加した3人の大学院学生にとっては、自らの研究計画を英語で報告する訓練の場として、また、具体的な情報と助言を得る場として、貴重な機会となった。

2) 若手研究者ワークショップ

2018年7月に、東京拠点が海外から受け入れている若手研究者（一部本事業経費外）の報告会を開催した。このイベントには、東京拠点のジュニア・メンバーが多数参加し、フラン

ス拠点の Stanziani 教授や東京拠点の羽田も含め、出席者の間で活発な意見交換が行われた。

2019 年 3 月には、過去 5 年の間にジュニア・メンバーとして GHC の活動に参画した若手研究者たちが、彼ら自身の発案で、まとめのワークショップを開催した。当日は十数人のメンバーが出席し、このうち 5 人（内田、江本、岡本、寺田、門間）が、GHC を通じての自らの達成と課題の発見を報告し、活発な意見交換が行われた。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

本拠点と並んで、グローバルヒストリー研究分野で国際的な活動を活発に展開している大阪大学の研究者たちと、今後の協力関係の強化とグローバルヒストリー研究のさらなる発展方策を話し合うための集いを、2019 年 2 月に持った。双方の強みとネットワークを活かして互いの活動を共同で行うこと、大阪大学の秋田茂教授が会長を務めているアジア世界史学会の学会活動への参加を通じて、本拠点が大阪大学の活動を支援すること、大阪大学の若手研究者が GHC のサマースクールに参加することによって若手の交流を進めることなど、具体的な方策が話し合われ、実りの多い会合となった。

また、本拠点の研究者やジュニア・メンバーが執筆した『パノラマ世界史』（大月書店）が、中国語に翻訳され出版された。中国の出版社からの依頼で、代表研究者の羽田とジュニア・メンバー 2 名（鵜飼敦子、内田力）が上海で開催される大規模な書展（2018 年 8 月中旬）に赴き、ブックトークを行った。現地の研究者や一般市民、それに多数の子供たちが聴講し、イベントの後には直接対話を活発に行った。

6-2 全期間にわたる研究交流成果

（1）国際研究交流拠点の構築

① 日本側拠点機関の実施体制（拠点機関としての役割・国内協力機関との協力体制等）

日本側拠点機関である東京大学では、東洋文化研究所が中心となり、学内他部局に所属する研究者をネットワークでつなぐ形をとった。海外拠点機関への派遣は、比較的年長の実績ある教員、サマースクールのように期間が長く負担の大きいイベントへの参加は、若手教員に協力を依頼した。結果として、人文社会系研究科、総合文化研究科、経済学研究科、東洋文化研究所、史料編纂所という 5 部局の教員が、積極的にこの事業に参加する体制を構築することができた。

国内他機関に所属する協力研究者にも、サマースクール、共同研究ワークショップ、それに研究者派遣の事業に適宜参加してもらった。プリンストン・東京二大学間のウィンタースクール以外のイベントでは、東京大学とその他の研究機関の研究者・学生の上に区別は設けず、各自の意志を確認して、適宜参加してもらった。

これらの方策により、東京大学東洋文化研究所を中核にして、イベントごとに学内外の研究者が柔軟に対応し協力する体制が構築できた。

海外からの研究者によるセミナー、国内研究者が参加する研究集会などは、主に、東洋文化研究所の会議室を使って開かれた。東洋文化研究所は、海外からの研究者や大学院学生を受け入れる機関として、十分に機能した。研究所内の共同研究室には、机と個人で使用でき

る本棚、ロッカーなど基本的な設備が備わり、彼らが支障なく研究活動を展開できるように配慮がなされている。図書館やインターネットなど学内の施設やインフラも自由に使用できる。

なお、本拠点は、単に海外の3拠点との交流のためだけに設置されたわけではない。それ以外の研究機関からも多くの研究者や大学院学生を受け入れて、日本における新しい世界史/グローバル・ヒストリー研究の拠点として機能している。代表研究者の羽田が、訪問研究員（一定期間、研究所に滞在する研究者）として本事業期間中に受け入れた海外の研究者の数は48名であり、他機関からの研究者の多くも、積極的に本事業のイベントにも参加している。

② 相手国拠点機関との協力体制（各国の役割分担・ネットワーク構築状況等）

海外3拠点との間では、研究者・学生の派遣と受入れを恒常的に行う体制が構築できた。拠点の責任研究者が、あらかじめ派遣研究者と学生について対象拠点の責任研究者に通知して受入れを依頼する。受入れ依頼を受けた拠点は、講演の企画、学生のビザ取得支援などの準備を行うことになる。また、4拠点の主要な研究者は、頻繁にメールによる情報共有と意見交換を行っている。共同研究集会のテーマ、開催時期と場所、サマースクールの開催時期と場所については、主としてこのネットワークを通じて決定される。

ベルリン拠点が新しく計画したGlobal Intellectual Historyの博士課程大学院の設置、パリ拠点の研究者が中心になって立ち上げたGlobal Studiesの共同研究には、東京拠点が推薦者、参加者として協力し、その展開に大きく貢献した。また、プリンストン拠点とは、二大学間でのウィンタースクールが実施されるようになり（本事業経費外）、さらに緊密な協力体制が構築されている。

本事業が終了した後の2019年9月に東京大学でGHCのサマースクールを開催すること、2020年1月には、プリンストン大学で4拠点合同の研究集会と東京大・プリンストン大二大学間でのウィンタースクールを開催することがすでに決定している。このことから、新しい世界史/グローバル・ヒストリー研究の国際的な拠点として東京大学拠点が確実に構築されたことは明白であり、補助金事業の終了後もこの事業によって組織された国際教育研究ネットワークが継続し、さらに拡充されてゆくことが期待できる。

③ 日本側拠点機関の事務支援体制（拠点機関全体としての事務運営・支援体制等）

東京大学東洋文化研究所の事務部研究支援担当者が、代表研究者と緊密な連絡を取りながら、拠点機関としての各種書類の作成や日本学術振興会との連絡業務を担当してきた。研究者・学生の派遣・受け入れに関わる業務、海外3拠点、国内協力研究者、ジュニア・メンバーとの連絡、研究集会やセミナーの開催は、拠点代表の羽田と専任の学術支援職員が担当してきた。学術支援職員は、東洋文化研究所のサーバーを使って開設された拠点独自のウェブサイトのアップデートも担当し、本事業の基本的なデータに加えて、イベントのお知らせや研究成果の紹介、活動報告などの情報を随時アップしてきた。このウェブサイトリンクさせて、Facebookのアカウントも設け、情報の一般への周知に努めた。

(2) 学術的観点

本事業を通じて得られた学術的な成果は、きわめて大きい。主要な研究成果は、別添の業績リストを参照頂きたいが、特に、4つの拠点の研究者の論文を集めた『グローバル・ヒストリーの可能性』(2017年)、代表研究者である羽田の単著『グローバル化と世界史』(2018年)はGHCの活動の直接の成果で、これらによって、世界におけるグローバルヒストリー研究の多様性が明らかになる一方で、日本語でのグローバルヒストリーの意味と方法が確定された点は特筆されるべきである。

数多くの日本語の専著、編著、論文などに加えて、主要な研究の中国語、韓国語への翻訳がなされている点は特記されるべきである。これは、日本におけるグローバルヒストリー関連の研究成果について、とりわけ東アジア各国で関心が高まっていることの表れであろう。また、代表研究者と何人かの協力研究者は協力して、『新しい世界史へ』と『海から見た歴史』を英語に翻訳して出版した。これによって、東京拠点の研究者が共有している新しい世界史/グローバルヒストリーの考え方を、海外の研究者に容易に伝えることができるようになった。代表研究者の羽田は、2019年度に、EHESSとプリンストン大以外にも、韓国・中国からモロッコ・アルゼンチンに至る多くの海外研究機関から招待を受けており、その学術活動の地平は大きく広がった。

海外拠点の研究者たちも、GHCの活動によって多くの刺激と情報を得、ベルリンのConrad教授は*What is Global History?*(2016)、パリのStanziani教授は、*Les entrecroisements du monde. Histoire globale pensée globale* (2018)をそれぞれ刊行している。また、プリンストンのAdelman教授がウェブ上に発表した論文”What is Global History Now?” (Aeon, 2017年3月2日)は、関係研究者の間で大きな話題となった(例えば、https://warwick.ac.uk/fac/arts/history/ghcc/blog/jeremy_adelman_what/)。

GHCのネットワークが学術的に重要であるとの認識は4拠点の研究者たちに共有され、それ故にこそ、共同研究ワークショップが継続的に開催されている。現在進行中のNational Narrative of Global Integrationと題する共同研究は、終了後、プリンストンのAdelman教授の編集によって刊行予定である。また、これに続く次の共同研究のテーマとして、”Global History of Identity”が、すでに羽田によって提案されており、GHCを通じた研究交流はさらに活発に展開されることになるだろう。

(3) 若手研究者育成

大学院学生を東京拠点から海外拠点へ3～6ヵ月程度派遣し、海外拠点からの派遣学生を東京拠点で受入れた(期間は1ヵ月程度から1年まで、個々の学生によって異なる)。5年を通じてその数は、ベルリン拠点との間では、派遣3人(H26年度:1人、H29年度:2人)、受入れ6人(H26年度:3人、H27年度:3人)、パリ拠点との間では、派遣2人(H27年度:1人、H30年度:1人)、受入れ3人(H26年度:2人、H28年度:1人)、プリンストン拠点との間では、派遣5人(H27年度:1人、H28年度:2人、H30年度:2人)、受入れ12人(H26年度:2人、H27年度:3人、H28年度:1人、H29年度:3人、H30年

度：3人）である。

派遣学生は、各拠点の責任者のアドバイスをうけながら、各大学の授業への出席と研究報告、研究資料の収集などを精力的に行った。東京拠点では、内外の若手研究者がともに切磋琢磨できる環境を整えているので、海外3拠点以外からも、若手研究者が多数訪問・滞在し、東京大学のポスドクや大学院学生と混じり合って互いに刺激を与え合っている。

2015年度から、4拠点合同のサマースクールを年に1回開催してきた。各拠点から3～4名の大学院学生と2～3名の教員が参加し、学生の博士論文執筆計画について、意見・情報交換を行うもので、一週間、朝から夕刻まで議論が続く。一週間のうちに学生たちは、仲間意識を強く持つようになり、スクールの終了後もスカイプなどを使って自主的に彼らの間の国際ネットワークを維持・発展させている。例えば、第1回の東京でのスクールに参加した学生たちは、その後2年以上の時間をかけて粘り強く共同で論文を執筆し、フランスのウェブ雑誌に投稿した (<https://journals.openedition.org/acrh/8074>)。

このサマースクールの成功をうけて、2016年9月からは、プリンストン拠点との間で、二大学の大学院学生を対象とするウィンタースクールを開催するようになった（本事業経費外）。

これらの事業によって、本事業実施期間中に30人を超える大学院学生に対して研究支援を行った。すでに博士論文を書き終えた者が現れ、若手研究者が自主的にグローバルヒストリーに関する研究集会を開くようになり、若手研究者育成の成果は着実に挙がっている。

もう一点、本事業が世界レベルでも若手研究者育成に貢献している例を挙げておきたい。代表研究者の羽田が、日本学術振興会の外国人特別研究員として受け入れたスウェーデンの若手研究者が、東京大学東洋文化研究所での滞在を終えた後、ベルリン拠点に新たに設置されたグローバルヒストリー大学院にポスドク研究者として採用された。この研究者（Lisa Hellman）は、東洋文化研究所滞在中の2016年12月9-11日に、GHCの枠組みを活用して、”Towards a Transcultural History of Diplomacy”と題する大規模な国際会議の企画・運営に尽力し、それがベルリンへの移籍の決め手となったという。彼女は、2019年9月に東京で開催予定のサマースクールには、ベルリン拠点のメンバーとして出席する予定である。Hellmanは、正に本事業によって育成された卓越した若手研究者だと言えるだろう。同じ国際会議の企画責任者であるオーストリアの若手研究者Birgit Tremml-Wernerも、羽田の許に日本学術振興会外国人研究員として滞在した後、現在は、チューリッヒ大学のポスドク研究者となって研究を続けている。

（4）社会貢献や独自の目的等

GHCの活動とその成果の一端として刊行された『グローバル化と世界史』（羽田正著、2018年）は、日本経済新聞で複数回紹介されている（2014.12.6、2018.5.26、2018.8.11）。羽田自身も、グローバルヒストリーに関連する書籍について新聞紙上で書評を発表している。また、NHK教育テレビの「高校世界史」で、グローバルヒストリー的な過去のとらえ方を具体的に説明している。さらに、小中学生を対象とする『輪切りで見える！パノラマ世界史』全5巻を刊行し、研究成果の一般への普及に努めている。

(5) 予期しなかった成果

東京大学では、2019年の12月にTokyo Forumと称する大規模な国際会議の開催を予定しており、代表研究者の羽田はこの会議開催の責任者に指名された。海外拠点の責任者との話の中でその準備に言及したところ、プリンストン拠点のAdelman教授が協力を申し出てくれた。会議の全体タイトルは”Shaping the Future”であり、その下のセッションの一つとしてプリンストン大の研究者が中心になって”Urban Futures”を組織することになり、Adelmanと同僚のAlison Isenberg教授が暫定的なプログラムを作成し、現在、その内容について、羽田と彼らの間で相談が続いている。このように、このネットワークを通じて、単にグローバルヒストリーについてだけではなく、他の分野についても、国際的な連携が強化されつつある。

『パノラマ世界史』全5巻が中国語に翻訳されるとは予期していなかった。さらに、翻訳書である『全景世界史』全5巻が、中国で大きな関心を呼び、上海書展でブックトークが開催され、オンラインで中国国内に中継されるとはまったく想定していなかった。この高い関心のゆえに、この本は、監修者羽田のインタビュー付で『文匯讀書週報』に紹介されたほか (<http://coretocore.ioc.u-tokyo.ac.jp/news/2018/06/post-25.html>)、「客観日本」と題するウェブサイトでも取り上げられている

(http://www.keguan.jp/kg.jp_jiaoliu/kg.jp_jl_renwu/pt20180918060002.html)。

この本を通じて、グローバルヒストリーという過去のとらえ方を中国の知識人や一般人、さらには子供たちに伝えることができた点は重要だと考えている。

(6) 今後の課題・問題点及び展望

4拠点によるネットワークは確立しているので、今後はその充実と拡大に努めたい。代表研究者は、現代世界における重要な概念であり、より多くの研究者が参加できる共同研究のテーマとして”Global History of Identity”を提案し、すでに他の拠点の責任者から同意を得ている。2019年9月の東京でのサマースクールには、海外の主要な研究者が集まるので、その機会を利用して予備的な会議を開催する予定である。

現在、GHCは、いわゆるGlobal South諸国の研究機関と研究者をそのネットワークのメンバーとはしていない。マッチングファンドを原則とする交流に、これらの国々の研究機関と研究者を組み入れにくいからである。しかし、「世界史」を検討する以上は、ネットワークを拡大しこれらの国々の研究者を共同研究に引き込むことが必要である。一定の資金が必要となるが、その負担について海外3拠点と相談しながら、着実にネットワークの拡大を進めたい。

7. 平成30年度及び全期間にわたる研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成30年度
共同研究課題名	(和文) 世界史/グローバル・ヒストリーの方法 (英文) Methodology of World/Global History				
日本側代表者 氏名・所属・ 職名・研究者番号	(和文) 羽田正・東京大学東洋文化研究所・教授・1-1 (英文) HANEDA Masashi・Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo・Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職名・研究者番号	(英文) Jeremy ADELMAN, Professor, Princeton University, 2-1 Alessandro STANZIANI, Professor, EHESS, 3-1 Andreas ECKERT, Professor, Berlin Humboldt University, 4-1				
30年度の研 究交流活動及び得 られた成果	<p>1. 4 拠点主要研究者による研究集会の開催</p> <p>4拠点コーディネーターが連携を図り、2017年1月に東京、9月にベルリン、2018年1月にプリンストンで報告・議論してきた共同研究のテーマ(National Narratives of Global Integration)についてさらに議論を深めることを目指し、主要研究者が一同に会するセミナーを2回開催した(S-1、パリ 2018年6月18-20日、東京2019年1月25-26日)。さらにもう1回の会合(2020年1月)の後に成果の公刊が予定されている。このように一つのテーマについて継続的にワークショップを開き、視点と方法を共有して議論を深めることは、GHCがネットワークとして有効に機能していることの証左であり、この手法によって深められた独自の研究成果が、国際歴史学界に大きなインパクトを与えるだろうことが期待される。</p> <p>2. 講演会、国際ワークショップの開催</p> <p>以下のように、東京において、来日した他拠点の研究者による講演会やセミナーと拠点外機関の研究者をも招いた国際ワークショップなどを開催した。また、東京圏以外(大阪)で研究交流会を開催した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) プリンストン大学 Linda Colley 教授、同 David Canadine 教授講演会、4月4日、於：東京大学東洋文化研究所 2) 国際ワークショップ ‘Global History and Hybrid Political Economy in the Early Modern World, c. 1550-1850’、4月21-22日、於：東京大学東洋文化研究所 3) 国際ラウンドテーブル 『新しい世界史へ』 から 『グローバル・ヒストリーの可能性』 へ」 4月23日、於：東京日仏会館 				

- 4) Alessandro Stanziani EHESS 教授大学院セミナー（4月11、18、25日、5月9、16、23日）
- 5) Michael Feener 教授（オクスフォード大）講演会、9月18日、於：東京大学東洋文化研究所
- 6) シンポジウム「資本主義の比較史—Yamamoto, 2018 Taming Capitalism before its Triumph をめぐって」10月6日、於：東京大学経済学研究科
- 7) 李伯重教授（北京大学）講演会、1月16日、於：東京大学東洋文化研究所
- 8) 「グローバル・ヒストリー研究交流会」2月16日、於：大阪大学中之島センター

これら日本国内での活動によって、新しい世界史/グローバル・ヒストリー研究における東京拠点の重要性が国内外で知られるようになった。また、8)によって、大阪大学やその周辺の研究者との研究連携が進展した。

3. グローバル・ヒストリー教育研究ネットワークの充実・拡大を目指した研究者交流

以下のように、海外で、4拠点以外のグローバル・ヒストリー研究者との交流を図った。

- 1) 代表研究者による Beijing Forum での講演（5月5日）於：北京大学（本事業経費外）
- 2) 代表研究者による東華大学（上海）での講演（5月8日）（本事業経費外）
- 3) 代表研究者によるサン・マルコ大学（リマ）での連続講演（5月21、22日）（本事業経費外）
- 4) ウォーリック大学グローバル・ヒストリー・センターとの共同交流会議（12月7日）於：ウォーリック大学ヴェネチア校舎
- 5) 代表研究者による新・人文学ワークショップでの基調講演（1月7日）於：オーストラリア国立大学

これらの活動により、GHC の存在は海外の多くの国と研究者に知られるようになり、このネットワークの今後の拡充が見通せるようになった。

4. 海外拠点への研究者派遣

東京拠点の研究者が海外3拠点に赴き、受入れ先で講演と学術交流を行った。

- ・ベルリン拠点へ：2名（弓削9日、山本8日）

	<ul style="list-style-type: none"> ・パリ拠点へ：2名（羽田5日、山本9日） ・プリンストン拠点へ：3名（後藤9日、森永10日、松方10日（松方のみ別資金）） <p><u>5. 海外拠点からの研究者受入れ</u></p> <p>プリンストン拠点から、Linda Colley, David Canadine 教授を受け入れ（4月）、パリ拠点からは、コーディネーターのAlessandro Stanziani 教授を受け入れた（4月～9月）。滞在中には東京拠点研究者・学生との交流のために、講演会、ラウンドテーブルやセミナーを開催した。これら研究者の派遣と受入れにより、他の3拠点の個々の研究者との間で互いの関心に対する理解が深まり、様々なテーマについての研究交流が芽生えつつある。</p> <p><u>6. サマースクールの開催</u></p> <p>2018年6月18日～23日、パリのEHESで4拠点の大学院学生を対象とする第4回サマースクールを開催した。東京拠点からは4名の大学院学生と、3名の研究者が参加した。</p> <p><u>7. 東大-プリンストン大・ウィンタースクールの開催</u></p> <p>2019年1月24日、東京大学において、プリンストン大学と東京大学の大学院学生を対象とする第3回ウィンタースクールを開催した。プリンストン大学から大学院学生4名と教員1名、東京大学から大学院学生3名と教員4名が参加した（本事業経費外）。</p> <p><u>8. 海外3拠点への大学院学生の派遣</u></p> <p>今年度は、パリ拠点に1人、プリンストン拠点に2人を派遣した。</p> <p><u>9. 海外3拠点からの大学院学生の受入れ</u></p> <p>今年度は、プリンストン拠点から4名を受け入れた。これらのサマースクール、ウィンタースクールや若手研究者派遣と受入を通じて、大学院学生を4拠点の研究者が共同で指導し、次世代の世界レベル研究者の養成に資する体制を構築することができた。</p>
<p>全期間にわたる研究交流活動及び得られた成果の概要</p>	<p>本事業の目的は、日本における新しい世界史/グローバル・ヒストリーについての研究拠点を構築し、海外3拠点と共同で、国際的な教育研究ネットワークを確立することである。5年間の活動によって、その両方において十分な成果を挙げることはできたが、ネットワークの確立が目的の一つで</p>

あるため、海外の3つの拠点のそれぞれと個別の共同研究を行ってはいない。従って、以下では、1. 4拠点による共同研究、2. 研究者・学生交流、3. このネットワークの大きな特徴である大学院学生のためのサマー、ウィンタースクール、4. その他特筆すべき活動について概要を述べる。

1. 4拠点による共同研究

1) 新しい世界史/グローバルヒストリーの方法

グローバルヒストリーという新しい歴史研究に取り組もうとすると、意識的に、従来とは異なる視点や方法を採用せねばならない。そこで、4拠点の主要な研究者が集まり、方法論的な議論を4回行ない、問題意識と研究手法の共有をはかった。日程、開催場所とテーマは次の通りである。

- ・2014年12月5日（ベルリン）Positionality
- ・2015年9月9日（東京）Potential
- ・2015年11月4～6日（パリ）Scale
- ・2017年1月27、28日（東京）Sources

これらの共同セミナーのうち、東京でのPotentialについてのセミナーの成果は、『グローバル・ヒストリーの可能性』（山川出版社、2017年）として出版されている。また、これらのセミナーにおける議論は、4つの拠点の研究者の個別の著作の中に十分取り込まれている。

2) グローバルな統合についての一国史的語り（National Narratives of Global Integration）

一国史の理解と叙述は、国や言語によって異なるが、その背景には、世界情勢とその国の関係についての「常識」が半ば無意識のうちに織り込まれている。一国史の枠組みの中でのグローバルな事象の叙述と理解についての具体例をできるだけ多く挙げ、そこから世界各国における歴史理解と世界観を逆照射しようとする。2017年から始まったこの共同セミナーは、以下の日程・場所にて合計4回開催され、出席者間での批判・情報提供を継続的に行った。

- ・2017年9月（ベルリン）
- ・2018年1月（プリンストン）
- ・2018年6月（パリ）
- ・2019年1月（東京）

これによって、参加者による問題意識と視点、手法の共有が進んだ。2020年1月に最後のワークショップを開き、その後成果をとりまとめて出版をする予定である。

以上2つの共同研究により、4つの拠点に所属する主要な研究者は、方法論を共有すると同時に、互いの専門領域と関心を十分に知ることができ、ネットワークの実質化が大いに進んだ。

2. 研究者・大学院学生の交流

5年を通じて、海外3拠点との間で、研究者と大学院学生の相互訪問を継続的に実施した。東京拠点を起点に行われた各拠点との間の派遣と受入れの数を、以下にまとめて記す。

■ベルリン拠点：

- ・派遣：研究者3人、大学院学生3人
- ・受入れ：研究者3人、大学院学生6人

■パリ拠点：

- ・派遣：研究者4人、大学院学生1人
- ・受入れ：研究者10人、大学院学生3人

■プリンストン拠点：

- ・派遣：研究者9人、大学院学生5人
- ・受入れ：研究者5人、大学院学生9人

派遣された研究者は、原則として、訪問先の海外拠点で報告を行うとともに、現地の研究者たちと積極的に学术交流を行った。個々の研究者が複数の研究者と緊密な関係を築き、自身の研究テーマに関して意見・情報交換を行うためのよい機会となった。

大学院学生は、3ヵ月から6ヵ月間訪問先の拠点に滞在し、受入れ教員の授業への出席、関連教員からの博士論文指導、セミナーでの報告などを行った。派遣された大学院学生の中には、すでに博士論文を提出して職に就いた者（程永超、名古屋大学高等研究院助教）や、優秀な博士論文に与えられる賞を受賞した者（江本弘、第8回南原繁記念出版賞、<http://www.utp.or.jp/news/n20365.html>) が生まれている。また、派遣先を再度訪れ積極的に自らのテーマに関するワークショップを開催した学生（寺田悠紀）もいる。大学院学生の派遣は、彼ら自身の研究にとって重要な意味を持っただけではなく、東京拠点と海外3拠点の関係強化にも大きく貢献した。2019年3月には、次に述べるサマースクールも含め、本事業によって海外に派遣された学生たちが自主的に交流集会を開催し、互

いの研究を紹介し意見と情報の交換を行った。彼らは今後もこの集まりを続けてゆくそうである。若手研究者の育成は相当程度の成果を挙げている。

受入れた海外拠点からの研究者には、必ず公開講演を依頼し、意見交流の機会を持った。また、長期で滞在した研究者は、講演以外にも、連続授業や、日本国内の他機関の研究者も含む研究集会を企画するなどして、東京拠点の活動に貢献した。多くの卓越した研究者が東京拠点を訪れて講演と学術交流を行ったため、国内でグローバルヒストリーや世界史に関心を持つ研究者によい刺激を与えることができた。また、海外の研究者は、講演の際の質疑や滞在中の交流から、日本の学界の研究水準の高さに強い印象を抱き、多くの場合、以後の交流が活性化している。

海外拠点から東京拠点を訪れた大学院学生は、東洋文化研究所に数か月から1年程度滞在し、自らの博士論文についての研究を進めた。何人かの学生は、代表研究者の大学院セミナーを受講した。また、若手研究者交流会を年に何回か開催し、東京拠点のジュニア・メンバーである大学院学生との交流の機会を設定した。海外拠点の学生には、そこで滞在中に必ず1度は研究発表を行うよう依頼した。この交流会は、海外の学生に自らの研究をまとめて話す機会を提供し、彼らの間できわめて好評だった。本拠点に滞在した海外の学生の中にも、すでに博士論文を完成させ、ポスドクに雇用されることが決まっている者が出てきている。

3. サマースクール、ウィンタースクール

以下のように、4拠点が共同して、次世代を担う若手研究者育成のためのサマースクールを年に1回開催した。

- ・第1回 2015年9月7日～12日 於：東京大学
- ・第2回 2016年5月9日～14日 於：プリンストン大学
- ・第3回 2017年9月4日～9日 於：ベルリン・フンボルト大学
- ・第4回 2018年6月18～23日 於：社会科学高等研究院（パリ）

各拠点から、大学院学生4名程度、教員2～3名が参加し、あらかじめ提出されている大学院学生の博士論文の概要について、全員で討論し、各大学院学生に助言するという形式をとった。東京拠点の学生にとっては、英語で自身の論文の内容について本格的に議論でき、グローバルヒストリー研究の最先端で活躍する研究者から助言を得られるまたとない機会となった。多彩なテーマについての英語での議論が5日間朝から夕方まで続く

こととなり、東京拠点の学生はもちろん教員にとってもきわめてハードな体験だったが、このスクールを経験して学生は大きく成長する。

第1回目のサマースクール終了後、その有効性を確信したプリンストン拠点の Adelman 教授から、別の資金を使って東京とプリンストンの2拠点でも別に同種のスクールを開催しようという提案があった。これを承けて共同で行った申請が認められたので、以下のように、2017年から冬に2大学間でのスクールを開催した。

- ・2017年1月27日 於：東京大学
- ・2018年1月25日 於：プリンストン大学
- ・2019年1月24日 於：東京大学

4拠点のものと比べると小規模だが、その分かえって学生同士は親しく交流する機会を持ち、スクールの後で双方の拠点を訪問し、滞在して研究と交流を深める学生たちが現れている。

なお、このサマー、ウィンタースクールは、本受託事業が終了後も継続することが決まっており、サマースクールは2019年9月2～7日の予定で開催し、東京大学が2度目のホストを務めることになっている。

4. その他特筆すべき点

1) 多彩な出版活動による国内外への発信

本事業の期間を通じて、新しい世界史とグローバルヒストリーに関する相当数の書籍が日本語で刊行され、国内での新しい世界史とグローバルヒストリーの認知度は飛躍的に上がった。特に、『グローバル・ヒストリーの可能性』（2017年）は、4拠点の主要な研究者による論文をまとめたもので、この分野の革新性と重要性を歴史学界に伝えることに貢献した。

また、代表研究者の単著『グローバル化と世界史』は、「シリーズ・グローバルヒストリー」の第1巻として大きな関心を呼び、新聞紙上でも好意的に取り上げられた。今後共同研究者たちが続巻を出版することにより、シリーズ全体でさらに大きな社会的インパクトを与えることができるようになるだろう。

この間に、多くの研究者が英文で論文を発表しただけではなく、『新しい世界史へ』『海から見た歴史』『パノラマ世界史』など、代表研究者の日本語での著作が英語・中国語・韓国語に翻訳され出版されたことも、特筆すべきである。これらによって、日本における新しい世界史/グローバルヒストリー研究の展開が海外でもよく知られるようになり、今後、東京拠点を核

とする国際共同研究がますます盛んになるはずである。

2) 3拠点以外の海外研究機関との交流

5年間の活動を通じて、東京大学拠点と海外3拠点の間の連携と協力関係は確立したが、それと同時に、新しい世界史/グローバルヒストリー研究分野において、この3拠点以外との交流も進んだ。

期間内に、国内外でシンポジウムやパネルディスカッションを開催した3拠点以外の研究機関は、以下のとおりである。

- ・アムステルダム大学 (2015年7月、2018年10月)
- ・チリ・カトリカ大学 (2016年11月)
- ・マカレスター・カレッジ (2017年12月)
- ・ケント大学 (2018年4月)
- ・ウォーリック大学 (2018年12月)

また、事業期間中に代表研究者が、新しい世界史やグローバルヒストリーに関連する講演を行ったのは、以下の研究機関である。

- ・ソウル国立大学 (2015年4月27日)
- ・南洋工科大学 (2015年5月29日)
- ・香港バプティスト大学 (2015年12月7日)
- ・復旦大学 (2016年1月4日)
- ・南京大学 (2017年5月25、26日)
- ・東華大学 (2017年12月26日、2018年5月7日)
- ・エル・コレヒオ・デ・メヒコ (メキシコ・シティ) (2018年2月26日)
- ・北京大学 (2018年5月5日)
- ・サン・マルコ大学 (ペルー・リマ) (2018年5月21、22日)
- ・オーストラリア国立大学 (2019年1月6日)

これらの活動を通じて、新しい世界史とグローバルヒストリーに関連する日本の学界の状況は、海外でも相当程度に知られるようになった。本事業終了後の2019年度にも、代表研究者は、韓国・中国からモロッコ・アルゼンチンに至る多くの海外研究機関から招待を受けている。日本の関連分野における研究への高い関心と共同研究への期待がうかがわれる。

3) 国内での研究交流

東京大学拠点が独自で開催した国際会議以外にも、拠点が組織した国内研

究者を対象とする会議、拠点と他のプロジェクトとの共催による会議やワークショップを日本国内で開催し、主として日本人研究者の間での情報共有と意見交換の機会を持つように努めた。その主要なものは、以下のとおりである。

①GHC ワークショップ「グローバル歴史の方法」(2016年7月16日) 於：東京大学東洋文化研究所

②GHC ワークショップ「日本宗教史と世界をつなぐ」(2016年10月22日) 於：東京大学東洋文化研究所

③研究集会「グローバルアート・グローバル・歴史との対話」「グローバル・歴史におけるジェンダー・空間・都市」(糸・布・衣の循環史研究会との共催) 於：京都工芸繊維大学(2017年7月26日)、福岡西新プラザ(2017年7月29-30日)、東京大学東洋文化研究所(2017年8月5日)

④『グローバル・歴史の可能性』書評研究会(2018年3月18日) 於：長崎大学

⑤「グローバル歴史研究交流会」(2019年2月18日) 於：大阪大学中之島センター

以上の多彩な活動によって、新しい世界史/グローバル・歴史研究における4つの拠点間での教育研究ネットワークが確実に構築され、それを通じた研究交流が深化した。国内研究者にも多くの刺激を与えている。このネットワークは、補助金事業終了後も維持され、教育研究両面での安定的な協力が見込まれる。すでに、2019年度のサマースクールや共同研究ワークショップの日程が決定していることが、その証左である。

また、海外3拠点以外の研究機関や研究者との学術交流も活性化しており、本事業によって形成された国際的な教育研究ネットワークの拡充が見込まれる。

7-2 セミナー

(1) 平成30年度セミナー実施状況

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築」共同セミナー「世界の統合に関する一国史的語り」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Global History Collaborative” Joint Seminar “National Narratives of Global Integration”
開催期間	平成30年6月18日 ~ 平成30年6月22日 (5日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) フランス、パリ、社会科学高等研究院
	(英文) France, Paris, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 羽田正、東京大学東洋文化研究所・教授・1-1
	(英文) HANEDA Masashi, Professor, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo,1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号 (※日本以外 での開催の場合)	(英文) Alessandro STANZIANI, Professor, Research Centre for History, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales ・3-1

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (フランス)		備考
		A.	B.	
日本	A.	6/30		
	B.			
アメリカ	A.	8/40		
	B.			
ドイツ	A.	6/30		
	B.			
合計 <人/人日>	A.	20/100		
	B.	0		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14 (=2人を7日間ずつ計14日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	Global History Collaborative の4つの拠点が共同で取り組む研究テーマ（世界の統合に関する一国史的語り）について、主要な研究者が集まって互いに自らの知見を報告するとともに、情報と意見を交換し、論集出版を目指す。		
セミナーの成果	一国史の理解と叙述は、国や言語によって異なるが、その背景には、世界情勢とその国の関係についての「常識」が半ば無意識のうちに織り込まれている。2017年度から継続的に行われてきたこの共同研究によって、世界各国における歴史理解と世界観の特徴が明らかとなりつつある。また、副次的な成果として、4拠点の主要な研究者間の相互理解が飛躍的に進んだ。		
セミナーの運営組織	EHESS Research Centre for History（コーディネーター：Alessandro STANZIANI）		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容 外国旅費 その他の経費 不課税・非課税取引に係る消費税	金額 2,674,159円 13,680円 211,748円
	(アメリカ)側	内容 外国旅費	
	(フランス)側	内容 会議費 国内旅費	
	(ドイツ)側	内容 外国旅費	

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築」共同セミナー「世界の統合に関する一国的な語り」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Global History Collaborative” Joint Seminar “Workshop on National Narratives of Global Integration”
開催期間	平成31年1月25日 ~ 平成31年1月26日 (2日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、東京大学東洋文化研究所 (英文) Japan, Tokyo, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 羽田正・東京大学東洋文化研究所・教授・1-1 (英文) HANEDA Masashi, Professor, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo, 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文)

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)		備考
		A.	B.	
日本	A.	17/34		
	B.			
アメリカ	A.	3/6		
	B.	4		
ドイツ	A.	2/4		
	B.			
フランス	A.	3/6		
	B.			
中国	A.	1/2		
	B.			
合計 <人/人日>	A.	26/52		
	B.	4		

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人／人日は、2／14（＝2人を7日間ずつ計14日間派遣する）のように記載してください。

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	この会合は、4拠点の主要な研究者が集まって具体的な研究テーマに基づいて報告と意見交換を行うためのものである。これまでも毎年1度、開催してきており、本事業目標を達成するためのもっとも重要なイベントである。		
セミナーの成果	2018年6月にEHESSで行った会合と同じテーマで、問題をさらに掘り下げ、グローバル・ヒストリーという研究方法が持つ可能性を確認するとともに、共同研究の成果を学界に提示するための具体的な出版計画について議論した。すでに、複数の出版社から企画の提案が届いており、具体的な研究成果は遅滞なく公表される予定である。また、GHCとしての新たな共同研究のテーマについても意見交換を行った。		
セミナーの運営組織	東京大学東洋文化研究所（コーディネーター：羽田 正）		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容 その他の経費	金額 699,584円
	(アメリカ)側	内容 外国旅費	
	(フランス)側	内容 外国旅費	
	(ドイツ)側	内容 外国旅費	

(2) 全期間において実施したセミナー件数

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
国内開催	0	0	2	0	1
海外開催	1	1	0	1	1
合計	1	1	2	1	2

7-3 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

- ① 評価コメント（抜粋）：「この交流計画によって初めて切り開かれたと言えるようなグローバル・ヒストリーの可能性について、具体的な研究テーマを通じて学界に提示していく必要性」

対応：一国史の枠組みで理解されているグローバルな事象を、世界全体を視野に入れて見直し、新たな解釈を共同で提案するためのワークショップ（National Narratives of Global Integration）を、2017年度以来、すでに4回開催し、最終の会議（2020年1月）を経て、英文で論文集を刊行する。それに続いて、「アイデンティティ」という概念の各国、各言語への導入とその時代による変遷、現代的な意味を検討する共同研究「Global History of Identity」を立ち上げる予定である。

- ② 評価コメント（抜粋）：「国内の共同研究参加の東京圏の偏り」

対応：本事業を開始した当時、協力研究者は広く日本国内に散らばっていたが、その後、人事異動などにより、東京在住者が多くなった。しかし、日本人研究者を主たる参加者とする国内での研究会は、首都圏以外でも開催することにしており、2018年3月には長崎大学で、2019年2月には大阪大学で研究集会を開いた。特に、大阪での会では、大阪大学のグローバルヒストリー研究者のグループと直接意見・情報交換を行い、今後の協力について具体的に相談した。2019年9月に東京大学で開催予定のGHCサマースクールには、大阪大学の大学院学生が参加する予定である。

- ③ 評価コメント（抜粋）：「旧被植民地国・発展途上国の研究者・研究機関を取り込む形での事業の拡大展開により、展望が開ける可能性を感じる」

対応：この点は十分に認識しており、他の3拠点の研究者たちとも継続的に話し合いを行っている。本事業の枠組みで旧被植民地国や発展途上国の研究者を共同研究に組み入れることは、経費の性格上できなかったため、2019年度以後に、他の3拠点以外の海外研究機関、特に、中国、韓国など他のアジア諸国の大学とラテン・アメリカ諸国の大学を対象に事業の拡大を目指す。具体的には、代表研究者の海外各地での講演に加えて、9月の東京でのサマースクールに、ソウル国立大学の研究者と大学院学生を招くことを予定している。

8. 研究交流実績総人数・人日数

8-1 平成30年度の相手国との交流実績

別紙参照

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

※相手国以外の国へ派遣する場合、国名に続けて(第三国)と記入してください。

8-2 平成30年度の国内での交流実績

6 / 18 (0 / 0)	0 / 0 (25 / 25)	0 / 0 (0 / 0)	22 / 63 (23 / 23)	28 / 81 (48 / 48)
------------------	-------------------	-----------------	---------------------	---------------------

8-3 全期間にわたる派遣・受入人数

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
派遣人数	14 (3)	16 (0)	17 (3)	17 (2)	18 (9)
受入人数	0 (10)	1 (33)	12 (24)	4 (7)	0 (20)

※各年度の実施報告書の「相手国との交流実績」に記載の人数を転記してください。

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

9. 経費使用総額

9-1 平成30年度経費使用額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	1,539,485	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	10,430,261	
	謝金	46,146	
	備品・消耗品購入費	335,917	
	その他の経費	1,817,665	
	不課税取引・非課税取引に係る消費税	830,526	
	計	15,000,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		1,500,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合計		16,500,000	

9-2 全期間にわたる経費使用額

(単位 円)

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
国内旅費	2,216,893	1,564,332	1,124,020	2,348,760	1,539,485
外国旅費	7,545,924	8,390,326	10,049,856	10,038,972	10,430,261
謝金	298,217	117,989	14,912	0	46,146
備品・消耗品購入費	642,147	42,899	91,441	1,548,878	335,917
その他の経費	4,703,004	4,065,861	2,975,765	1,399,087	1,817,665
不課税取引・非課税取引に係る消費税	593,815	318,593	744,006	664,303	830,526
合計	16,000,000	14,500,000	15,000,000	16,000,000	15,000,000

※各年度の実施報告書の「経費使用額」を転記してください。

※「不課税取引・非課税取引に係る消費税」について、平成27年度以前の実施報告書では「外国旅費・謝金等に係る消費税」の記載となっています。

10. 相手国マッチングファンド使用額

※全期間にわたる相手国のマッチングファンドの状況概要について、記入してください。

①	相手国名	アメリカ合衆国
	拠点機関名	プリンストン大学
	経費負担区分	パターン1
	マッチングファンドの 状況概要	<p>1. 学術助成機関名：プリンストン大学 プログラム名：Faculty Research Fund 支給期間：2014 . 4 . 1 ～2016 . 6 . 30 本事業採択期間内のおおよその使用金額：年 5,000 ドル</p> <p>2. 学術助成機関名：プリンストン大学 プログラム名：Princeton-Humboldt Partnership Fund 支給期間：2014 . 4 . 30 ～2016 . 6 . 30 本事業採択期間内のおおよその使用金額：108,000 ドル</p> <p>3. 学術助成機関名：プリンストン大学 プログラム名：Mellon Foundation 支給期間：2015 . 9. 1～2016 . 7 . 31 本事業採択期間内のおおよその使用金額：175,000 ドル</p> <p>4. 学術助成機関名：プリンストン大学 プログラム名：UTokyo-Princeton Strategic Partnership Initiatives 支給期間：2016 . 9. 1～2019 . 8 . 31 本事業採択期間内のおおよその使用金額：90,417 ドル</p>
②	相手国名	フランス
	拠点機関名	社会科学高等研究院（EHESS）
	経費負担区分	パターン1
	マッチングファンドの 状況概要	<p>1. 学術助成機関名：EHESS プログラム名：Exchange International Program 支給期間：2014 . 4 . 1 ～2018 . 3 . 31 本事業採択期間内のおおよその使用金額：年 50,000 ユーロ</p> <p>2. 学術助成機関名：CNRS／社会科学高等研究院（EHESS） プログラム名：GDRI 支給期間：2015 . 1 . 1 ～2018 . 12 . 31 本事業採択期間内のおおよその使用金額：年 66,000 ユーロ</p>

		<p>3. 学術助成機関名：CNRS／社会科学高等研究院（EHESS） プログラム名：Global History Collaborative 支給期間：2019 . 1 . 1 ～2022 . 12 . 31 本事業採択期間内のおおよその使用金額：4,750 ユーロ</p>
③	相手国名	ドイツ
	拠点機関名	ベルリン・フンボルト大学
	経費負担区分	パターン1
	マッチングファンドの 状況概要	<p>1. 学術助成機関名：ベルリン・フンボルト大学 プログラム名：Funds of Research Center re:work 支給期間：2014 . 4 . 1 ～2018 . 3 . 31 本事業採択期間内のおおよその使用金額：年 8,000 ユーロ</p>
		<p>2. 学術助成機関名：ベルリン・フンボルト大学 プログラム名：Princeton-Humboldt Partnership Fund 支給期間：2014 . 4 . 30 ～2016 . 6 . 30 本事業採択期間内のおおよその使用金額：76,800 ユーロ</p>
<p>3. 学術助成機関名：ベルリン自由大学 プログラム名：Chair Global History 支給期間：2014 . 4 . 1 ～2016 . 3 . 31 本事業採択期間内のおおよその使用金額：20,000 ユーロ</p>		
<p>4. 学術助成機関名：ベルリン・フンボルト大学 プログラム名：Funds of Research Center re:work 支給期間：2016 . 7 . 1 ～2019 . 3 . 31 本事業採択期間内のおおよその使用金額：20,000 ユーロ</p>		
	<p>5. 学術助成機関名：ベルリン・フンボルト大学 プログラム名：Funds from Graduate School “Global Intellectual History” 支給期間：2017 . 4 . 1 ～2019 . 3 . 31 本事業採択期間内のおおよその使用金額：50,000 ユーロ</p>	

8-1 平成30年度の相手国との交流実績

別紙

派遣先 派遣元	四半期	日本	アメリカ	フランス	ドイツ	中国（第三国）	ペルー（第三国）	イタリア（第三国）	合計
日本	1		0 / 0 (0 / 0)	7 / 144 (0 / 0)	1 / 9 (0 / 0)	0 / 0 (1 / 7)	0 / 0 (1 / 4)	0 / 0 (/)	8 / 153 (2 / 11)
	2		1 / 188 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (3 / 12)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	1 / 188 (3 / 12)
	3		0 / 0 (0 / 0)	2 / 8 (0 / 0)	1 / 8 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	2 / 12 (3 / 21)	5 / 28 (3 / 21)
	4		3 / 49 (1 / 9)	1 / 4 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	4 / 53 (1 / 9)
	計		4 / 237 (1 / 9)	10 / 156 (0 / 0)	2 / 17 (0 / 0)	0 / 0 (4 / 19)	0 / 0 (1 / 4)	2 / 12 (3 / 21)	18 / 422 (9 / 53)
アメリカ	1	0 / 0 (2 / 4)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (2 / 4)
	2	0 / 0 (1 / 50)		0 / 0 (8 / 40)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (9 / 90)
	3	0 / 0 (0 / 0)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	0 / 0 (8 / 58)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (8 / 58)
	計	0 / 0 (11 / 112)		0 / 0 (8 / 40)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (19 / 152)
フランス	1	0 / 0 (1 / 91)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (1 / 91)
	2	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	3	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	0 / 0 (3 / 16)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (3 / 16)
	計	0 / 0 (4 / 107)	0 / 0 (0 / 0)		0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (4 / 107)
ドイツ	1	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	2	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)	0 / 0 (6 / 30)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (6 / 30)
	3	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	0 / 0 (2 / 10)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (2 / 10)
	計	0 / 0 (2 / 10)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (6 / 30)		0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (8 / 40)
イギリス （第三国）	1	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)	/ (/)	/ (/)				0 / 0 (0 / 0)
	2	0 / 0 (1 / 1)	/ (/)	/ (/)	/ (/)				0 / 0 (1 / 1)
	3	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)	/ (/)	/ (/)				0 / 0 (0 / 0)
	4	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)	/ (/)	/ (/)				0 / 0 (0 / 0)
	計	0 / 0 (1 / 1)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)				0 / 0 (1 / 1)
中国 （第三国）	1	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)			0 / 0 (0 / 0)
	2	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)			0 / 0 (0 / 0)
	3	0 / 0 (0 / 0)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)			0 / 0 (0 / 0)
	4	0 / 0 (2 / 4)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)			0 / 0 (2 / 4)
	計	0 / 0 (2 / 4)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)			0 / 0 (2 / 4)
合計	1	0 / 0 (3 / 95)	0 / 0 (0 / 0)	7 / 144 (0 / 0)	1 / 9 (0 / 0)	0 / 0 (1 / 7)	0 / 0 (1 / 4)	0 / 0 (0 / 0)	8 / 153 (5 / 106)
	2	0 / 0 (2 / 51)	1 / 188 (0 / 0)	0 / 0 (14 / 70)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (3 / 12)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	1 / 188 (19 / 133)
	3	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	2 / 8 (0 / 0)	1 / 8 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	2 / 12 (3 / 21)	5 / 28 (3 / 21)
	4	0 / 0 (15 / 88)	3 / 49 (1 / 9)	1 / 4 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	4 / 53 (16 / 97)
	計	0 / 0 (20 / 234)	4 / 237 (1 / 9)	10 / 156 (14 / 70)	2 / 17 (0 / 0)	0 / 0 (4 / 19)	0 / 0 (1 / 4)	2 / 12 (3 / 21)	18 / 422 (43 / 357)